

- (31) *Ibid.*
- (32) L. Landucci, *Op. cit.*, p. 140.
- (33) J. Smitzer, *Op. cit.*, S. 365-366; Nuova ediz. cit., pp. 408-409.
- (34) E.N. *Prediche sopra Ezechiele*, a cura di R. Ridolfi, vol. I, Roma, 1971, pp. 1-16.
- (35) 参照、↓木田『古代イスラエルの預言者たち』、前掲、一九一―二〇二頁。
- (36) E.N. *Prediche sopra Ezechiele*, vol. I, cit., pp. 67-102.
- (37) なお R・リドルフィは、『マキアヴェッリの生涯』（前掲）でこう述べている（一九二頁）。―「ロープによる吊るし落とし」の拷問〕は、普通、四回であらゆる肉体、あらゆる精神を打ちのめすのに十分だった。十分でなければ、手足の関節がはずれ身がさけてもさらに続けられた。マキアヴェッリには、それが六回なされた。実に強い精神と忍耐力でもって耐えたので、彼は『自分に満足したほどだ』」。
- (38) Cfr. Salvatore Battaglia, *Grande Dizionario della Lingua Italiana*, vol. VI, ristampa 1972, (最大のイタリ
ア語辞典、大型版全二一巻のうちの第六巻) pp. 909-913.

(以下、次章、続載)

の修道院長だったドメニコ・ダ・ペーシア (Domenico da Pescia) だと、ドイツ語、イタリア語両版で附記されている。なおこの書簡は、この年10月末に市内で活版印刷・刊行されている。参照、↓須藤・油木 共編著、読む年表・年譜 (等々、前掲)、一五二頁。

- (22) E.N.: *Prediche sopra Ruth e Michea*, vol. II, cit., pp. 298-329.
- (23) Pseudo Bulfinch, *Op. cit.*, p. 114. — 折りにふれて参照してきているこの書については、↓参照、II 章の註 (47)、III 章の註 (17)。
- (24) 前章から表われているこの言葉「悪魔の家」〔= casa del diavolo〕は、用いられている色々の文脈における意味を考えると、「煉獄」〔= purgatorio〕に当たるものかとも地獄〔= inferno〕に当たるものかとも思われる。しかし確かなことは筆者には分からない。
- (25) E.N.: *Prediche sopra Ruth e Michea*, vol. II, cit., pp. 71-108.
- (26) ちなみに本稿の校正過程で、『毎日新聞』(二〇一六年一月二九日)の読者投稿川柳欄(3面)に、次のような句が入選、掲載されているのが目に入った。——「宿敵と同じ神社で願を掛け 新庄 こだま岳人」。
- (27) R. Ridolfi, *Vita*, cit., pp. 269-270; J. Shmitzer, *Op. cit.*, S. 383-384; Nuova ediz. cit., pp. 429-430; Cfr. L. Martines, *Op. cit.*, p. 139.
- (28) A. Gherardi, *Op. cit.*, pp. 315-317.
- (29) L. Martines, *Op. cit.*, p. 139.
- (30) R. Ridolfi, *Vita*, cit., p. 271.

始され（一四五二・五五―五六）年）てからまずイタリアへ（六五年）、次いでフランス、オランダへ（七〇年）などヨーロッパ各都市、各国へ伝えられた過程は、四五頁以降のⅠおよびⅣ欄、フィレンツェでの印刷開始については八〇頁のⅡ欄。→参照、→の註（21）。

- (11) R. Ridolfi, *Vita*, cit., p. 250.
- (12) *Ibid.* Cfr. P. Parenti, *Op. cit.*, vol. II, Città di Castello, 2005, pp. 20-21.
- (13) E.N.-*Prediche sopra Ruth e Michea*, vol. I, a cura di Vincenzo Romano, Firenze, 1962, pp. 3-30.
- (14) R. Ridolfi, *Vita*, cit., p. 254.
- (15) E.N.-*Prediche sopra Ruth e Michea*, vol. I, cit., pp. 348-385.
- (16) E.N.-*Prediche sopra Ruth e Michea*, cit., vol. II, Firenze, 1962, pp. 1-37.
- (17) R. Ridolfi, *Vita*, cit., pp. 257-258.
- (18) E.N.-*Prediche sopra Ruth e Michea*, vol. II, cit., pp. 109-137. Cfr. J. Shnitzer, *Op. cit.*, S. 344, 357. Nuova ediz. cit., pp. 389-390, 401-402. R. Ridolfi, *Vita*, cit., p. 258.
- (19) Pseudo Bulramacchi, *Op. cit.*, pp. 99-100. R. Ridolfi, *Vita*, cit., p. 258.
- (20) R. Ridolfi, *Vita*, cit., pp. 258, 275. J. Shnitzer, *Op. cit.*, S. 342. Nuova ediz. cit., p. 388.
- (21) A un suo familiare, in E.N.-*Lettere e Scritti Apologetici*, cit., pp. 138-140. Cfr. J. Shnitzer, *Op. cit.*, S. 361-362. Nuova ediz., cit., pp. 405, 414. 444の『書簡』Shnitzer の書で、Briefchen an einen Vertrauten = Epistioletta a un suo familiare [= 彼の親友への小書簡]と題され、その綴りもイタリア語訳新版では familiare が famigliare になっている。またこの「親友」とは、当時フィレンツェに隣接するフィエーレン

Vita, cit., p. 247.

- (10) この時期のフィレンツェにおける活版印刷の状況とそこでサヴォナローラがはたすことになった役割については、近年の研究書として参照、↓アンドルー・ペティグリー『印刷という革命 ルネサンスの本と日常生活』、桑木野幸司訳、白水社、二〇一五年（原著は二〇一〇年）、九五頁。原著者の註によれば、「これらの時期にフィレンツェで出版された264点の書物のうち、サヴォナローラの説教は100点を超えている」（原注・21頁）。——但しこの刊行数の根拠は何も示されていない。そのため総数については、本文の記述と註で示す数とが照応していないと思えることもあって、疑問が残る。サヴォナローラに関しては、速記に採られた各説教の印刷本を彼の他の著書と同じく一点として数えているため「100点を超えている」となったのだろう。しかしこの断定の根拠も示されていないため、この数についてもやはり疑問が残る。

La stampa a Firenze 1471-1550, Omaggio a Roberto Ridolfi, Firenze, 1984, 頁一四七—一五〇年にフィレンツェで刊行された活版印刷本、四五点が刊行順に列挙され、各々について刊行に関わる事項や本の形体などが解説されている (Catalogo a cura di D. E. Rhodes)。

なお一五世紀末の三〇余年に刊行の活版印刷本は、インクナーボロ・インキュナブラ (incunabolo・incunabulum ≡ 揺籃期本・初期刊本) と呼ばれる。

この時期のサヴォナローラの主な著述・著書の刊行については参照、↓須藤、油木兵衛共編著、読む年表・年譜『ルネサンス・フィレンツェ、イタリア、ヨーロッパ——サヴォナローラ、マキアヴェッリの時代、生涯』、無限社（岡崎）、二〇〇二年、一四七—一六五頁のⅢおよびⅣ欄。——活版印刷がドイツで開

ら続けてきたこの拙論が、キリスト教信仰の枠外から追究しようとしているのは、主に素の人間サヴォナローラをめぐる諸問題である。

註

- (1) R. de Maio, *Op. cit.*, p. 73; A. Gherardi, *Op. cit.*, pp. 140-143; J. Shnitzer, *Op. cit.*, S. 328-329; Nuova ediz. cit., p. 372; R. Ridolfi, *Vita*, cit., pp. 242-243.
- (2) E.N. *Prediche sopra Amos ecc.*, vol. III, pp. 370-409.
- (3) Cfr. P. Parenti, *Op. cit.*, p. 328; R. Ridolfi, *Vita*, cit., p. 244.
- (4) R. Ridolfi, *Vita*, cit., p. 245.
- (5) E.N. *Lettere e Scritti Apologetici*, cit., pp. 122-123; R. Ridolfi, *Vita*, cit., pp. 245-246.
- (6) このミラーノ公の君主像の大意は「参照」→R・リドルフィ『マキアヴェッリの生涯』須藤訳・註解、岩波書店、二〇〇九年の訳者による「人物解説」(七三七頁)。
- (7) In P. Villari, *Op. cit.*, Nuova ediz. pp. cxxxvij-cxxxix. 但この書簡の原文資料は複数あるようだが、R. Ridolfi, *Vita*, cit., p. 246に部分引用されているP. Villariのこの書に収録されている全文とはかなり異なる。RidolfiはVillariの書の収録文の方がより恭しくなっていると註記している(*Op. cit.*, vol. II, p. 169)。しかしRidolfiの引用文の方がより恭しいようにも思える。
- (8) E.N. *Lettere e Scritti Apologetici*, cit., pp. 124-125. Cfr. R. Ridolfi, *Vita*, cit., p. 246.
- (9) Pseudo Burtinacchi, *Op. cit.*, pp. 85-86; L. Landucci, *Op. cit.*, p. 129. (前掲日本語訳「一四一頁」); R. Ridolfi,

こうした問題を認識せず、信仰者サヴォナローラの言動と素の人間サヴォナローラの言動とを無意識のうちに同一視して、あるいは混同して論じてきたため、これまでのサヴォナローラ論は、一方では真摯な、強靱な信仰者の、他方では頑迷な、 \wedge 異端者 \vee 的な次元の彼を彼の総体であるかのように論じてきてしまったと思える。

こうした現象が続いてきたのは、まず、論者の多くが、とりわけ海外の主要な論者のおそらくは（ほとんど）すべてが同じキリスト教の信徒だったからではないか？ 無意識のうちにサヴォナローラと同じ信仰の次元に立って彼を見ていたからではないか？ キリスト教信仰の外側から、さらには神といった類の様々の存在そのものの信仰の外側から、それらの信徒の内面深くにある素の人間を見ようとしてこなかったからではないか？ そして我が国で彼を多少とも語ってきた者たちは、無意識のうちにそれら海外の論者の見解を当然の前提として彼を語ってきたからではないか？

問題の現象が続いてきたのは、次に、彼自身の内面の要因にもよるものではないか？ 内面で信仰者サヴォナローラが力を増し、素の人間サヴォナローラを彼自身が見失ない、あるいは喪失し、あるいは疎外し、信仰者である自分を自分のすべてだという幻想を抱き、その幻想の自分が抱く心情、思い、信念、これこそ自分だ、自分の内心のすべてだと信じて語り、かつ書いてきたからではないか？ ——このため、これまでくり返し指摘してきたように、彼の言説が素の人間である彼の本心の表出なのか、信仰上の幻想の中の彼の \wedge 本心 \vee の表出なのか判断し難い状態が続いているのではないかと思える。

ともあれ、常に参照してきているリドルフィ（R. Ridolfi）、シュニッツァー（J. Schitzer）、ヴィッラリ（P. Villari）などを代表とする様々な先達の研究に敬服し学びながらも、何か形容し難い違和感を覚えなが

て厳しく残酷に、冷酷に罰する、死んで「悪魔の家」に落としてからもなお罰し続ける、恐ろしすぎるほど恐ろしい存在である。自分に従おうとしない者、そう思うこともない者は未来永劫、徹底して罰し続ける非情にして残酷な、冷酷な存在と言ってもいいだろう。

今ここで見ている説教では、追いつめられ死の危険を痛いほど感じている彼が、自分を不当にも追いつめている、すなわち自分を神の意志、法に逆らって追いつめている「邪悪な者」、「悪しき者」に、懸命に反駁しようとしている。したがって、ここで言っている *fare giustizia, iustizia* を、「正義を行なう」、「義を行なう」といった中途半端な、曖昧な言葉に訳出することはとてもできない。「処罰する」という言葉に、場合によっては「処刑する」という言葉に訳出しなければ、彼の本意を表現できない。そう思えてならない。

ただし、考慮しておくべきことが二つある。一つは、サヴォナローラが語っている神が真にキリスト教の説く神なのかどうかということである。こうしたいわゆる神学的なことは筆者には分からない。しかし、日本語聖書表現に表われる神がサヴォナローラの語る神でないことは確かなように思える。そこで拙論では、特に今たどっている時期のサヴォナローラの説教に関しては、「正義を行なう」、「義を行なう」という表現をあえて用いない。

考慮しておくべきもう一つは、彼の「本意」は、「正義を行なう」ということだったのかもしれないということである。厳しく処罰することがまさに「正義」の実践だと彼は信じこんでいたと思われるからである。しかしこれは信仰者サヴォナローラの「本意」である。信仰の地平の下の地平深くに潜み、信仰を生み出す核を成していた、素の人間サヴォナローラの本意とは言えないと思える。

ない。キリスト教の枠外にいてその素養も知識もきわめて不十分な者が語るのは不適切かと思ひ控えてきたのだが、ここでは、この拙論全体の追究対象に関わってくるからである。具体的に言えば、日本語聖書の訳語や表現を、イタリア語聖書の言葉や表現と比較対照した際に覚える——しこれまでも他の事例でしばしば覚えてきた——違和感を、ここではこれまで以上に強く覚えるからである。

ここで用いた「処罰」という言葉のイタリア語すなわちサヴォナローラが用いている言葉、*giustizia* には、正義、裁き、処罰、処刑、といった意味がある。⁽³⁸⁾

したがって彼がしばしば言っている *fare giustizia, giustizia* は、これらの意味の事を行なうという意味になる。したがってまた、最もゆるやかな意味では「正義を行なう」と表現するのが適切になり、最も厳しい意味では「処刑する」と表現するのが適切になる（はずである）。しかし、管見の限りでは、日本語の聖書ではこうした表現は常に——と思われるほど——、「正義を行なう」、「義を行なう」と最もゆるやかな表現になっている。あえていうなら機械的に、画一的に、実に中途半端な、曖昧な意味に訳出されている。これによって神もその厳格さ、恐ろしさ、徹底性の度を下げた、良く言えばゆるやかな存在、有りていない言えば中途半端で曖昧な存在にされているように思えてならない。——なぜなのか？

サヴォナローラにおいては、これまでしばしば見てきたとおり、神は「慈愛」、「慈しみ」、「赦し」の本源的存在であると同時に、きわめて厳しく恐ろしすぎるほど恐ろしい「罰」の本源的存在でもある。神の意志、神の法に従って「正しく生きる」者や一切の罪を「告解」して、「悔い改めて」「赦し」を乞う者は、そういう者だけは、限りなく優しく「赦し」「慈しむ」存在であるが、神の意志、神の法に従わず、その罪を「悔い改め」ず、「赦し」を得ようとせず、神に逆らって生きる「邪悪な者」、「悪しき者」は、徹底し

ため、その痛苦はきわめて激しいという。これに耐えられるのはせいぜい四回だったと言われる⁽³⁷⁾。その限度ぎりぎりまで拷問を、サヴォナローラは「悪しき者」たちを「処罰」したがない担当官吏にも加えよと、閣僚たちに指示しているのだ。無論ここでは、「悪しき者」たちでこの罰に値する者に加えることが、当然、前提になっているだろう。この「処罰」もほとんど「処刑」と言っていいたいだろう。

そしてすぐ、説教の結びのところで彼は叫ぶ。――「処罰が先頭に立って進むようにするのだ、処罰は主（なる神）の使者だからだ」。……「閣僚閣下、とにかく処罰を、司法八人会議の委員諸氏よ、処罰を、フィレンツェの行政官たちよ、処罰を、市民よ、処罰を、男たちよ、処罰を、女たちよ、処罰を」。こうすれば「神は汝らに恩寵を与えて下さるだろう」、と説教を結ぶ。

この最後の叫びだけを考えれば、「処罰」は「正義」と言いかえてもいいかもしれない。しかし、その「正義」は「剣」を不可欠の道具とするものであり、常備の軍隊によって、あるいはきわめて残酷な拷問を駆使して遂行されるものである。遂行の対象にされた「悪しき者」たちにとっては、「正義」どころか自分たちに向けられた「処刑」の宣告である。「正義」の名の下に宣告される「処刑」ほど、される側にとって無念で冷酷で救し難いものはないだろう。

公式の場でこう宣告する側とされる側の対立は、当然、熱くなるだろう。先に見たランドウッチの視点から言うなら、「神の諸々の恩寵と奇蹟を感じるとる善良で賢明な人たち」と、「恩知らずなフィレンツェ人」たちとの戦いは、こうしていわば最終戦に向かって熾烈になっていく。

* 本文で傍点を附した「処罰」の訳語とこれをめぐる表現について、ここであえて附言しておかねばなら

の事を長々と論じた上でサヴォナローラは、「平和は諸々の処罰なしには存在しない」と結論を言う。そして、「処罰と平和は口づけし」——（日本語聖書では「正義と平和はたがいに口づけし」——、と旧約聖書「詩篇」八五篇—11を、そうとは言わずに引用し、かつこれを、「処罰と平和はたがいに抱き合い口づけし合っているのだ、結ばれているのだ」と解釈してみせる。「悪しき者」たちを「処罰」しなければフイレンツェに「平和」はない、滅びしかないと呼んでいるのだ。「処罰を早く行なえば行なうほど早く恩寵に恵まれるだろう」、とつけ加えてもいる。

さらに言う。——「処罰は剣なしには進まない。それゆえ、処罰を行なわないといった考えを持たないように身近に剣を備えておけ。二百ないし三百の兵士を備えておけ。誰かが処罰に値するを行なうと分かったら兵士を出してその者を捕らえよ。……誰であれえこひいきなくこのように処罰せよ。——ここで言われている「処罰」を、日本語聖書にならって「正義」・「義」と訳出することはとてもできない。軍隊を常設して「処罰」に当たらせよと言う時、この「処罰」は、ほとんど「処刑」と言っているのではないかと思えるからである。（参照、↓本稿本文末尾）

しかもサヴォナローラは、これでも言い足りないとかかりに、居ならぶ執政委員・閣僚たちに言う。——「こうした」「処罰を、担当官たちに行なわせることです。もし彼らがそうするのを望まないなら、そしてそれが……四回のロープによる吊るし落としに値するなら、その罰に処することです」。

「ロープによる吊るし落とし」とは、捕らえられた者の両足を足枷で縛り、天井にしつらえた鉄の滑車にかけたロープの一方の端で両肩、両腕を後ろ手にしめ上げ、他の端を引いて身体を吊るし、天井まで引き上げて落とし、また引き上げて落とすという、この時代の残酷な拷問である。腕は固定されていてまわらないのに上に引かれる

る」と断言している。

改めて言うまでもなく彼は、自分が今のフィレンツェの預言者エゼキエーレだ、ここフィレンツェで「神の砦」となっている預言者だ、神がそう言っている、と公言しているのだ。

ここでようやく、この説教のタイトルに「エゼキエーレ書」の冒頭（第一章ー1）——「わたし（「エゼキエーレ」が……捕囚の人々のうちにいた時、天が開けて、神の幻（「visione」を見た）——をおいている理由も見えてくる。自分も神の「幻」を見、その「幻」の声を聞いた、と言おうとしているのだ。前章で見たように自分を「このアモス」すなわち「現在のアモス」と言ったのに続いて、ここでは自分を「現在のエゼキエーレ」と言っているのだ。

このように自分たちの捕囚状態を語った上で、自分たちをここに追いこんだ、そしてさらに追いこもうとしている「信仰心無き者たちや邪悪な者たち」を「処罰」せねばならないと、説教の終わり近くになって、ようやく叫び始めたのだ。放置しておけば「この都市（国家）全体を滅ぼす危険がある」者たちに対して行なえと叫ぶ「処罰」には、もう「処刑」のニュアンスが含まれていると言えるだろう。

こうした傾向は、「政庁」からの要請に応じて行なった一二月一三日の説教で、より明らかに⁽³⁶⁾なる。ここでは、まずフィレンツェに対する神の「恩恵」をひとしきり語る。その「恩恵」の中心は、「大評議会」であり、それを核とする新政体によって生じた「自由」である。「これは神の最大の恩恵である」。……これを汝らは非常に喜んでゐた。しかし今、口説の徒、不平不満の徒など邪悪な「彼らはその恩を忘れてゐるばかりか、加えて恩恵を悪事とみなしている」。

それゆえこれら「悪しき者たち」を「処罰」せねばならない、となるのは当然の論理だろう。彼らをめぐる様々

たちはこの都市〔国家〕全体を滅ぼす恐れがあるのだという。

しかしここに至るまで、この説教の大部分は自分に対する、彼に言わせればいわれない非難、攻撃への反論である。たとえば、自分が汝〔ら〕を「だました」というなら、それは「神の光が汝〔ら〕をだました」ということだ。」「この修道士が汝〔ら〕をだましたのなら、その嘘が長年あばかれなかったのはどういうことなのか、と神は言っている。——ここでも、自分は「神の光」を受けて神の意志を聞いています、自分の言うことは神の意志なのだと言っている。

あるいはまた、「私は汝〔ら〕を支配しようなどと思っていない。私は言いたいことはここ〔＝説教壇〕で公然と言っている」。——裏面で自分の悪口をフィレンツェの内外に向けて広げている者たちとは、自分はまったく違うのだと強調している。

こう声高に自己主張しながら、彼は時に、自分に迫る危機も語る。——「汝〔ら〕は大変な危機に在ると言うかもしれない。しかし私ほど命の危険にさらされている者はいない。我々は、ここ〔フィレンツェ〕で、この移住〔＝捕囚〕状態に在るのだ。何と主なる神は、『汝らが私の言うことを行なおうと欲している限り、汝らの中にエゼキエーレ、すなわち神の砦は存在するだろう』と言っているのだ」。

自分は比類なき危機に瀕していると危機感を語りながら同時に、自分の神的存在を認識させようとしている。すなわち、「我々は」——といつもながら聴衆を自分にとりこみ、かつ彼らに自分との一体感を無意識に抱かせながら——、捕囚の身に陥っていたイスラエルの民の状態にここフィレンツェでおかれているのだと認識させている。加えて、この我々の中に、かつて捕囚状態に在ったイスラエル人たちの中で神の言葉を語り、語れないことは書き続けた預言者エゼキエーレが、まさに「神の砦」となっていたエゼキエーレ⁽³⁵⁾がいる、そう「神が言ってい

な気配はなかった。それどころか、情況は深刻になっていた。いつ終わるかも分からないピーサとの戦闘は近郊の農村地帯を疲弊させ、市内の食料不足が表面化していた。くり返しになるけれども、サヴォナローラに言わせれば戦闘、飢饉、ペストはすべて神罰だった。すべてが、日頃の諸々の罪の結果だった。あらゆる罪について「悔い改め」、神を信じ神に「依り頼む」ことだけが救われる道だった。そうしなければ救われないというのは、自明のことだった。

他方、サヴォナローラの反対派に言わせれば、フィレンツェの苦難、苦境はすべて彼の主導によるフランス王への傾倒、依存とその結果としてのイタリア内外での孤立が招いたものだった。いきおい、彼に対する様々の非難、企み、攻撃が、表面でも裏面でも激しくなった。彼が自分の一大功績としてくり返し暗示的に、いやもう半ば直截的に語り続ける神の「大評議会」とそれを「形相」「核」とする新政体への非難、攻撃が激しくなった。「政庁」への、また執政委員＝閣僚への攻撃も生じ始めていた。

こうした情況の緊迫化を、何よりもサヴォナローラの説教が物語っている。というのも彼は、彼が説く諸々の罪を犯す者たちの「処罰」(=*giustizia, iustizia*)*を訴え始めているのだ。しかもすぐ「処罰」の対象を広め、かつその内容を厳しくしていくのだ。「処罰」に「処刑」の意味をこめて語るようになっていくのだ。(参照、↓本稿本文末尾)

一月三〇日の、旧約聖書「エゼキエール書」の冒頭(一章ー一)をタイトルとする説教では、終わり近くになってから、フィレンツェの「司法八人委員会」の委員や諸々の行政官たち(=*Magistrati*)に、「諸々の悪徳や罪に立ち向かう法を、良き(＝正しき)法」を作れ、「処罰を！ 処罰を！」と命じている。その対象として具体的に挙げている悪徳者は、男色者と、「一日中、市民たちの悪口を言っている煽動家たち」だけである。特に煽動家

が、奇蹟だと確信して神をほめ讃えた。⁽³²⁾

まるで神風が恐るべき敵、皇帝とその強力な軍隊を一日にして一掃したかのような、まさに「奇蹟」のような物語である。そしてそれは「旧約聖書にある〔諸々の〕奇蹟のいずれにも劣らない奇蹟だった」と、ランドウッチは信じてやまない。そう信じようとしなくていい多くの者は「恩知らず」だとも信じてやまない。

この文章は、サヴォナローラの説教からの引用だと言ってもおかしくないだろう。彼の思考がいかに信奉者の内面深くに浸透していたかを示す好例だと言えるだろう。

だが実状はかなり違ったようだ。皇帝軍がリヴォルノ攻撃の態勢を整えないでいるうちに、マルセイユを出たフランス王の艦隊が密かにリヴォルノに接近し、皇帝の艦隊をいわば奇襲攻撃したため皇帝の艦隊が敗れ、皇帝はかろうじて逃れたというのが実状のようだ。⁽³³⁾

そうだったとすると、サヴォナローラの「光輪」フランス王の威力は、まだ全面的に消えていたわけではなかったかのようでもある。しかし注目すべきことに、「神の奇蹟と恩寵」を語る中でランドウッチは、フランス王軍の存在をまったく意識していない。意識しないまま、サヴォナローラがくり返していた「神の使者」フランス王の存在なしに生じた神の「奇蹟」を、「恩寵」を語っている。サヴォナローラの信奉者が彼の説教をそのままくり返しているかのような記述を、無意識のうちに、「光輪」を失なったサヴォナローラ自身への信奉の念から展開している。「光輪」が消えた、いうならば自立した——というよりは自立せざるを得なくなった——サヴォナローラを信奉する者の存在をみずから示している。

しかし、ランドウッチの言うリヴォルノでの「奇蹟」が、フィレンツェ市内で「奇蹟」的効力を発揮したよう

た。教皇庁内部では、この抗議に反論しないまま、いやできないまま、その書簡を破り捨てたという。⁽³⁰⁾

教皇庁内部のみならず、この勅書の名宛人とされた修道会の上層部にも、教皇（庁）の心底にある狙いの実現に協力するだけの意気を持つ者はいなかった。サン・マルコ修道院の新修道会への転属は無論、サヴォナローラの院長から一修道士への降格も、自分たちには抗し難い相当の論争、抵抗を招くことは必定と思われたからだろう。結果的に勅書は、少なくとも表面上、何の変化をもたすこともなく終わった。⁽³¹⁾

他方フィレンツェ市内では、ランドウッチのようなサヴォナローラ信奉者たちの信念は揺らいでいなかった。それを示唆するような記述がランドウッチ自身の『日誌』に見られる。

一月一七日、「ヴェネツィア人とジェノヴァ人の艦隊がひっくり返ったということだった。人が大勢おぼれて死んだということだった」。……その中に「皇帝用の艦艇が一隻」あった。ピーサの近くのリヴォルノをピーサ軍とともに攻略するためにそこにいたのだ。ただし、「皇帝は嵐がくる少し前に上陸していた」。……「事実上、彼らは陣を引き払った。皇帝は自分の艦艇を失なつたし自分の命も失なうところだった」。——こう述べた後、ランドウッチはつけ加えている。

皇帝は、この有りさまはフィレンツェ人への神の助けを表わす奇蹟だと見てとり、すぐ立ち去った。この計略を放棄したのだ。はるばるドイツからピーサを自分の配下に入れるために遠征して来たのに、だ。しかもピーサ人がみずから配下に入ろうとしていたのに、だ。こうしてこの戦火は一日で消えた。この奇蹟は旧約聖書にある〔諸々の〕奇蹟のいづれにも劣らない奇蹟だった。それなのに、そうみなそうとしない恩知らずなフィレンツェ人がたくさんいた。でも、神の諸々の恩寵と奇蹟を感じとる善良で賢明な人たちの大部分

たとしても、それを形式上、無視できる可能性も、教皇はあらかじめ残していたのだ。その上でさらに、勅書の中で、この指示にそむく者、異議を唱える者は「破門」を含む広範囲の罰に処すると宣告していたのだ。⁽²⁴⁾

サヴォナローラの反論を幾重にも封じておこうとする、この臆病とも思えるほど細心狡猾な、それでいて強硬な勅書の狙いがどこにあるのかは、関係者の誰もが暗黙のうちに見抜いていた。それは、いうならばこれまで彼を放置してきたロンバルディーア修道会から彼を引き離し、教皇庁の直接の監視と指揮を及ぼしやすいローマ修道会に移すことによって、さらにその過程で彼を修道院長から一介の修道士に降格させることによって、彼の言動の影響力を減らすことに、いや彼を完全に黙らせることにあった。

このことは、この勅書発信の最強の推進者だった(フランシスコ会)修道士フランチェスコ・メイが、この時から一年八ヵ月後、九八年七月八日、フィレンツェ「政庁」宛の書簡で明言している。サヴォナローラに早くから強く敵対してきた彼メイは、サヴォナローラの処刑後二ヵ月たらずして、自分もこの勅書も「サヴォナローラを根こそぎに、根絶やしにするために全力をつくした」と誇らしげに書いている。⁽²⁵⁾

しかもこの勅書発信には、彼の協力者だったドメニコ会守護枢機卿カラッファ(参照、↓Ⅶ章、前章)も同調していたという。サヴォナローラの教皇に対するかたくなな態度が教皇による彼への、またサン・マルコ修道院そのものへの重罰を招きかねないと危惧し、この枢機卿は密かに態度を変えていたのだという。⁽²⁶⁾ おそらくサヴォナローラが思ってもみなかっただろうところで、彼の足場は崩れていたのだ。

この勅書に対してサヴォナローラ自身が反論することはなかった。しかし、サン・マルコ修道院の二五〇名の修道士が全員一致で、勅令は教会の規則に反するものであり、命じられた新修道会への転属は、現在、自分たちが服している厳格な戒律の下から弛緩した戒律の下に入ることになるから従えないと、教皇宛に書簡で抗議し

くり返し神に代わって語ってやった、そして救ってやった自分を、あろうことか悪人あつかいして歯向かってくる者たちへの怒りを露わにしている。こうせざるを得ないところまで彼は追いつめられていたことを、この説教は物語っている。

それでも、説教の結びはやはり、「フィレンツェよ、悔い改めるのだ。人々よ、悔い改めるのだ」、である。そうすれば、「主は我々に幾つもの恩寵を与えて下さるだろう。この罰をやわらげて下さるだろう……」。

この頃、教皇は、サヴォナローラを黙らせる策を教皇庁内部でじっくり練らせていた。そして一月七日、トスカナとローマの二つの地方にある一六のドメニコ会修道院に対し勅書を発した。とはいえそれは、形式上ドメニコ会の上層部や各地方の主な修道院の指導者たちに宛てられていて、各修道院長に宛てられていたのではなかった。サヴォナローラにも宛てられていなかった。この中で教皇は、二つの地方の修道会を合わせた新たな「トスコ・ロマーナ修道会」の設立を命じた。かつ、その指導者はドメニコ会の総長および会の守護枢機卿によって二年以内に選出されるよう命じた。こうした改革の理由として、両地方が地理的に近接していることと、当該の各修道院に良き（「正しき」）慣習や正規の義務の遂行を広めるといふ教皇の「聖なる願い」とを挙げた。というのもこの「聖なる願い」は、各修道院ではフィレンツェのサン・マルコ修道院におけるほど完璧には実現されていないからだという。

まるで、サヴォナローラの数々の主張や行動を他の院に範として普及させたいという、「聖なる願い」から出た組織改革命令であるかのような言いまわしである。こう語ることによって、彼の反論をあらかじめ封じようとしたのだ。しかも、この勅書の名宛人から彼を排していたことで、この勅書について彼自身から教皇への反論があっ

無論、彼はあくまで自分が神に心から信従する「正しい」僕だと信じこんでいたのだろう。その信じこみが強いほど、神は彼の内部で彼により忠実に信従する僕と化していたのだろう。神という存在は、信仰者・信従者にとって何と大きな力を与え發揮させてくれる存在であることか。有ていに言うなら何と利用価値の大きな存在であることか。

同様のことが、彼サヴォナローラを非難、攻撃する他の、上は教皇に始まる全聖職者たちにも俗界の一般信徒たちにも生じていたはずである。——ただし、サヴォナローラに言わせるまでもなく彼らは、彼のように心底からの信仰は持たず、ただ神を華やかさと莊嚴さの中に飾り上げて利用していたのだろうが——。こうして、同一の信仰対象である神が、敵、味方として争う者たちのいずれの内面でも、相手を殺すことを赦す全能の僕として存在していたのだろう。いや異なつた諸々の神をめぐつても、また神と名づけられていない何らかの超越的な崇拜・信仰対象をめぐつても、その信徒・信従者たちの内面では同様のことが生ずるのだろう。⁽²⁶⁾だとすれば、ここでサヴォナローラについてだけ論ずるのは一方的すぎることになる。

そうではあるにせよ、いかに追いまれ危機感を強めていたとはいえ、彼は何と傲慢な、大胆すぎるほど大胆なことか。ここまで言えば当然、自分のこの大貢献をさておいて自分に異議を唱える者たちの「忘恩」を責めることになるだろう。説教を終える寸前で言う。

私は自分のことを案じているのではない。汝は神に逆らっているのだ。というのも〔私が述べた〕教義は私のものではないと汝に言つたからだ。おお、悪しき者よ、汝は自分が大恩を受けている当の者の悪口を言い、恩恵を悪事とみなしている。

だからこそ、万事が自分の言ったとおり、指示したとおりになったのだ、汝フィレンツェは、汝らフィレンツェの民は再び自分サヴォナローラによって救われたのだ、と声高らかに言っている、言えている。

しかし、既述のようにこの時、王はフィレンツェが期待していたことは何も語らず、市内に不満が生じた。また王も軍も急ぎ帰路についたのは、そうせねばならない、せざるを得ない事態が生じていたからだ。しかし彼はここではもうそれら現実の状況にはまったくふれない。——尤もあの時フィレンツェでは、彼の信奉者を中心に、王軍による再占領の危機が去ったということだけが喧伝され、かつそれはサヴォナローラの大きな貢献の賜物だと信じられた。そして今、彼はそれをこの説教で皆に思い起こさせようとしている。

その上で彼はさらに、フィレンツェがこの二年間、戦闘に見舞われなかったのは、神が様々な方法で汝を救って下さったからだとくり返す。そうしながら加えて言う。——「私が力を有しているとしたら、それは現在も他の時も神がその力を私の中で（「私を介して」）ふるおうとしておられるからだ」。

ここでも、自分の力は神の力だ、自分の内なる神の力だと断言している。こう全能の神を前面に出して、いや頭上はるかにかざして断言することによって、有りていに言うなら神を自分の全能の僕として利用している。

こうした傾向は先に見たように（参照、↓X章）、すでに一年あまり前にも表われていた。神の「大評議会」の廃棄を意図して「全市民集会」開催を試みる執政委員「閣僚を、「何びとが切り刻んでも罪を問われない」ことにせよと命じていた。しかも、こうしたこともすべて「まず〔神に〕祈った」上で行なうよう命じていた。神は自分に祈る者にそういうことを赦す存在だと暗示していた。今や、そういう神がその全能の力を彼の「中で」、彼を「介してふるおうとして」いると断言するに至っている。神はもう、彼の内部に在って彼の意志どおりに働く全能の僕と化しているのだ。

見て王に市内略奪を止めさせたと堂々と語っている。「神がすべてを……」「神によって……」と、取ってつけたように言っているのも、自分の神的威厳を、神聖性を感得させようとする意図の表われだろう。こう言うことによって、フィレンツェ市民に与えた自分自身の神的功績を強調しようとしている。しかも、当然のことかもしれないけれども、王とのこの合意が実際にフィレンツェにどの程度の効果を与えたのかを思い起こさせるようなことは、何も語っていない。

そしてさらに加えて次の会談——（彼が言っているようにこの説教の時点から二年前ではなく、一年四ヵ月前の九五年六月一七日の、近郊ボッジボンスイでの会談）——についても語る。ナーポリから事実上、敗退してきた王による市内再占拠の危険を覚えた「政庁」から派遣された時のことである。（参照、↓Ⅻ章）

「汝〔フィレンツェ〕が知つてのとおり私は王のところに行つたが、〔その時〕汝に、神が王に怒りを他所でぶちまけさせて下さるよう祈れと言が残した」。……「あの時、王陛下と話し、王〔軍〕はほとんど壊滅状態で〔フランスに向かつて〕出発した。私は話したのだ、貴殿たちは、私が前に言つたことを、神が欲していることを行なわなければ大苦難を背負うことになるだろうと。——さあフィレンツェよ、汝はあの時、神に依り頼みかつ祈つたから再び救われたのだ。……汝に言う、神に依り頼めば、とにかく汝は救われるだろう」。

自分の指示に従う者はすべて神に救われ、従わない者は「大苦難」にあうと豪語している。この前提には、神は自分サヴォナローラが祈るとおりに行動する、自分が赦そうと思う者を赦し、苦難にあうべきだと思ふ者に苦難を与えろという思いこみが、幻想がある。彼の内心では、全能の神は自分の思いをすべてこの世で代行してくれる存在になっている。言いかえれば、神はもう、彼の主張のすべてを正統化する全能の僕のようになっている。いや、有りていに言うならそういうものとして利用されている。

二年前に「救い出」された、「救われた」こととして「汝フィレンツェが思い出さねばならない」のは二つあるという。一つはメディチ支配からのそれであり、もう一つはフランス王の襲来、王軍による占領からのそれである。初めの件については、「革命が起これ、汝は神によって大きな危機から救い出された」と述べているだけである。彼の言う「革命」すなわちメディチ支配の崩壊そのものには、次のフランス王に関わる件に比べれば彼が誇るべき貢献はさほどないからなのだろう。ここでは何よりも自分の貢献の偉大さを暗示したい彼には、フランス王との関係こそ明瞭に語らねばならないことだった。

「王が汝（フィレンツェ）の市内にいた時、汝がどんな危機におかれていたかは汝が知っている。私のことを思い起こせ。私の修道士たちは知っているのだが、そして証人であるのだが、私は食事中、彼らに、この都市（国家）に大きな神罰が下されたのではないかと思うと言ったのだ。祈るよう全員に言ったのだ。そこで食卓からもあり、王陛下のところに行こうと思った、そして行ったのだ」。

ここから、王との合意に至る経緯を具体的に語っていく。「王の館」（＝占拠して自陣の本拠としていたメディチ宮）に着いた時、自分たちの思いをはばむ者は入れないと追い払われた。自分たちはフィレンツェ市内全体を略奪しようと思っているのだと言われた。しかし「事がどう動いたのか分からないが、すべて神が行なって下さったのだが、私は受け入れられ、突然、王陛下の前に導かれた。そこには王と王の重臣たちがいた。汝（フィレンツェ）の市民はいなかった。王は私に非常に丁寧に答えた。そしてすべての事が承認された」。……王は私にその承認条項を三度、読み上げさせた。「こうしてすべてを確認して私は外に出た。武器は置かれた。フィレンツェよ、これらは（我々が神に）祈ったから神が行なって下さったのだ」。

これは既述の九四年十一月二日の、王との三度目の会見のことである（参照、↓Ⅷ章）。自分が王との単独会

せた伸びやかな発想も、ここではまったく表われない。目の前の人間と、人間の有りようと、自分の内面で神に捕らわれず、虚心に対話するところから得られただろうあの思考は、先に見たような人間統治の具体的手法にかかわる範囲に、しかも神によってもたらされたと思はれる機構の内部での統治手法にかかわる範囲に限って、生じていたようである。

ともあれ彼は一〇月末のこの説教で、自分の必死の叫びに、勧告に、汝らは依然、従おうとしないと言いたかつたのだ。そして実際、内心でそう嘆いていた、嘆き続けていたのだろう。欠点はすべて汝らにあり、自分にはまったくない。そう彼は信じてやまなかつたのだ。

そうした心情を吐露するかにように彼は言う。――汝らのこんな有りようを、「私はなるようにならせておこうと思ってきた。もう説教しようという意志もなくなった。しかし政庁が求めてきたのでそれに従おうと思ったのだ」。さらに言う。――「イタリアが救われる方法はない。……すべての者が悪魔の家に遊びに行くのだろう。そこになら汝らも招かれるのだろう」。精一杯の皮肉をこめて言っていたのだろう。汝らは天国に、神の元に招かれるはずなどないと言いたかつたのだろう。

無論、彼はこうした思いだけで内心を満たしていたわけでは決してなかつた。説教もこうした嘆きで終わりはしなかつた。すぐまた言う。――「悔い改めよ、神を信じよ、そうすれば神は汝を救い出して下さるだろう。フィレンツェよ、汝は二年前、二度も神に救われたのだから、ここでも神に依り頼むべきなのだ」。そしてここから、その二年前の事の経緯を延々と語っていく。言うまでもなくそれは、彼自身がフィレンツェを「救い出し」た経緯であり、それによってフィレンツェに与えた大恩のことである。

は自分に問おうとしているのではないか？ そう問われたらどう答えればいいのか？ ——

こう自問してみる、そして自分の信仰と自分が見聞する現実とを内心で突き合わせながら、改めて自分が語っている教義を検証してみるきっかけを得る所に、この時、彼は立っていたはずである。言いかえれば、伝えられてきた△正統なV——と自分が信ずる——教義の信仰に、多少とも自分自身の思考を、思想を育み加えていくいい契機を得られる所にいたはずである。

しかし、こうしたきっかけ、契機など、たとえあったとしても、彼には感得できなかった。彼の内心の目には、自身の思考の生成を促すようなものは何も表われなかった。だから、厳しい現実には激しく打たれれば沈黙する他なかったのではないか？ なぜ？ と問えば先にもふれたように（参照、↓XII章）、彼には酷すぎることになるだろう。その根本の要因を求めれば、やはり生きた時代、生まれ育った環境、境遇や幼児の頃から受けた教育にまで、いやもつと根源的なところ、すなわち持つて生まれた気質、性格といったところまでさかのぼらねばならないだろうからである。

この説教でも、彼が取りあげ非難していること、そして強く勧告していることは、すべてこれまで何度もくり返しくり返し語ってきた、叫んできたことばかりである。そもそも「真実」、「真理」は、この時期の一連の説教によれば、「理性」で見えてくるものではなく、「神から与えられる」「超自然の光」、信仰の光によって見えてくるものだからである。自分は神から与えられたそうした光によって「靈感を与えられ」て汝らに「真理」を語っているのだから、自分の言っていることには「一点の過ち」もない。どんな現実にも直面しても、彼はそう信じて、信じこんでやまないのだ。

八月二〇日の説教で語ったあの「自由」の希求心も、「普き民衆の統治」における市民の言論の自由の勧奨で見

のか？

これまで彼は、多くの機会にこれら三要因を同時に語ってきた。直近の説教では、夏の長い中止期間明けの最初の、すなわち八月一日の説教⁽²⁵⁾でも、終わり近くで、「いずれにせよ戦闘、飢餓、そしてペストは来るだろうが、その時、私の言ったことは真理だと分かるだろう」と言っていた。「言ったこと」とは、「諸々の災難は悪しき者たち」に来るということである。つまり、ペストも「悪しき者」すなわち彼の言う「正しい生き方」に反している者を襲うということである。

また、三要因のうちのいずれか一つについてだけ語る場合は、ほとんどペストについてだった。

ところが、一〇月末のこの説教では、ペストについてだけ語っていない。まれな、いやほとんど無いことではないかと思える。偶然、語り忘れたということではまずないと思える。直に見聞する事実が、彼を揺るがせていたのではないか？

彼の語る「真理」すなわち「神に由来する真理」を信じ、かつそれに則して「神を信じ」神に「依り頼」んで生きる「正しい者たち」の中にも、当然ペストで死ぬ者が少なくなかったはずだ。そうした者がペストで「死んだ」と私は聞いたことも読んだこともない」とはとても言えない事実、これまでになく厳しい現実には直面し、内心を揺さぶられていたのではないか？

こうした推測が多少とも真実にふれているとしたら、彼はここで、自分が信ずる教義、説き続けてきた教義をいささかなりとも見つめてみる機会に遭遇していたはずである。

——あなたが教えてきたことを信じて「正しい生き方」をしようとしてきた者でもペストで次々と死んでいく。どうしてなのか？ どうして神は「正しい生き方」をしている者もしていない者も同じく罰するのか？ そう人々

なる。自分に逆らう者は神に、キリストに逆らうことになるからである。自分の言うことを信じない「汝も汝の仲間たちも神と戦っている」、「行ないを改めなければ汝らはかならず負ける、この世で地獄を味わい、死ねば悪魔の家〔= casa del diavolo 〕に落ちる」……「汝（ら）に悪いことが起こる」今「汝（ら）に神罰が近づいている」、と叫ぶことになる。（傍点は引用者）

したがってまた、「それゆえ私は汝（ら）に悔い改めよと勧めているのだ」、これまでの過つた生き方を捨て「正しい生き方」をせよ、と叫ぶことになる。「神に心を傾けよ」、「神に依り頼むのだ」、「神を信ずるのだ」、そのようにする「善良な（＝正しい）者たちは、飢餓が生じている中でも「最後には天国に行くだろう」、「神の僕が飢えて死んだなどと私は聞いたことも読んだこともない」、と叫ぶことになる。特に「貧しい者（たち）」に言う、――「神に依り頼むのだ。なぜなら神はそうする者（たち）を飢えて死なせることはないからだ。逆に「神を信じていない者」、「神を怒らせている者は飢えて死ぬだろう」。

飢餓とともにイタリア中を襲っていた戦闘、戦争についても言う。――「全イタリアを破壊したのは神なのだ、戦争を起こしたのは神なのだ」、「神はそう欲すればこの世全体の戦争を除去し中止させるのだ」、「神の前では「いかなる砦も城も軍隊も無駄なのだ」。「フィレンツェよ、神に依り頼めば恩寵を得るだろう」。

ところで、飢餓よりも、戦闘よりも全イタリアを揺るがせていた、そしてサヴォナローラがこの二つとともに神罰として語ってきたもう一つの要因、彼が説教で最も多く言及してきたもう一つの要因、すなわちペストについては（参照、↓前章）、この説教では何も言わない。ペスト（またはペストのような悪疫）は、少し前で指摘したように春にも発生し、そのため彼もこの年だけで二度も長く説教を中止せざるを得なかったのに、だ。なぜな

るというのだ。

信頼する親友、同志、すなわちこの春に自分が「政庁」から請われた説教を自分に代わって行なわせたドメニコ・ダ・ペーシャへの手紙だったからだとしても、あまりの樂觀、あまりの大言壮語ではないか？ いや、彼はむしろ、同志と信仰を、心を確認し合いながら自分を鼓舞激励し支えようとしていたのではないか？ こうせずにはおれないほど危機感と孤独感を覚えるようになっていたのではないか？ —— こう思わずにおれなくなる。

一〇月二八日、彼は通常よりも長い説教を行なった。人々からすぐ、「汝は確かなのか？」、「分かっているのか」「Se tu chiaro？」説教」と名づけられたと言われる。というのも彼は、敵対者たちが「サヴォナローラが我々をだましたことを汝は分かっているのか」と街頭で叫んでいたことを逆手にとって、説教の中で何度もこの問いを叫んだからだという。⁽²⁾ そう叫びながら彼は、フィレンツェの内外に向かって自分の悪宣伝を続ける者たちを糾問し断罪しようとしていた。いやそれ以上に、「私は確かだ」、「私は分かっている」と断言していた。さらには、「分かっている」自分がフィレンツェに対して行なった偉大な貢献を強調し、加えて自分に対する「汝（ら）」の「忘恩」を強調しようとしていた。

何を彼は「分かっている」のか。——「私が汝に予告したことは天に由来するもの」だ、すなわち神の御心によって与えられたものだということ、したがって「確かなもので無謬なものだ」、「過ちの在りようもない」ものだ、「もし一点でも過っているところがあれば、今すぐ天も地も終わりになるようなものだ」、「完璧なものだということ」、である。これを、自分が言っていることはキリストが言っていることだと言うなど、言葉をかえ、表現をかえながらくり返しくり返し何度も叫ぶ。叫び続ける。

ここから当然、したがって自分の言う「真理」に心を向けない、傾けない者たちに「罰が下る」と言うことに

だ。「神の栄光を求め共通善（＝益）を求めようとしないフィレンツェ人の罪」のせいなのだ。自分は「嘲笑」と「非難」にもめげずにもう六年にもわたってフィレンツェで、——というのも彼がフィレンツェに定着して説教活動を開始したのは九〇年だからなのだが——、神は「イタリアに大罰を下そうとしている」と言い続けてきた。六年前は「戦争などの不安はなかったが」しだいにそれが現実表われ始め、今も強まっている。自分の言ってきたことが「証明され」てきている。これからも証明されていくだろう。「知恵のある者なら容易に分かること」なのに、「不信者たちは神によつて盲目にされ、知恵も失なっているため……不義と無知のままに留まり」、諸々の罪を重ねている。それゆえ今もピーサを取りもどすこともできず様々の「苦難」にあっているのだ。

つまり彼は、フィレンツェは自分の言ってきたとおり「神に心を傾け」「神に依り頼め」ば、ピーサ問題も何もかも解決できたし今も解決できると言うのだ。加えて言う。——「フランス王のことは氣にかける必要はない。王が来なくても他の者たちが来るからだ」。「私が言ったことは欠けるところなく実現するだろう」……フィレンツェが世のあらゆる軍隊によつて包囲されても、「自分は笑っているだろう。なぜならイエス・キリストが特別にフィレンツェの王となつて下さっているからだ」。（傍点は引用者）

「王が来なくても……」というのは、王が前年一月に教皇との初の会見で、サヴォナローラから託された公会議開催・教会革新の要求をあつさり捨てたことを知った一〇日後の説教で言ったこと——「床屋一人で多くの者のひげを剃ることはできない。もう一人の床屋が来るだろう」（参照、↓XI章）——と同趣旨である。前年は「もう一人」が来ると言っていたのに、今や「他の者たち」が、複数の者が来ると言う。彼が言ってきた「神の使者」であるフランス王がフィレンツェを捨てても、神がフィレンツェを捨てることはない。他の「使者」たちを送ってくれるというのだ。自分が言ってきたことを守りさえすれば神はあらゆることからフィレンツェを救ってくれる

サヴォナローラ自身を守りかつ力づける「神の使者」だったかのようにさえ思われてくる。言いかねれば彼の威厳を表わし発する「光輪」だったかのようにも見えてくる。今やもうその「光輪」が消え失せたのだ。

二〇世紀の代表的サヴォナローラ研究者たちが、この九六年のこの時期が彼の「運命の頂点」だった、「彼の名声と声望の絶頂期」だったと述べているのは尤もだと思える。この頃から彼の「運命」は明らかに下降し始めたからである。

秋になると、フィレンツェを反フランス神聖同盟に加わらせようとする動きが活発になった。皇帝は軍を率いてジェノヴァにいた。フィレンツェと戦うピーサを支援するためだった。そしてそこからフィレンツェに、神聖同盟への加入を求めている。フィレンツェは使節を送り、ピーサをフィレンツェに返還すれば、その時は同盟への加入についても話し合うことができると、当面は要求拒否の意思を伝えた。

教皇は無論、皇帝のこうした動きを歓迎していた。皇帝軍がピーサ軍とともにフィレンツェまで攻めこみ、同盟への加入を認めさせるよう期待していた。ヴェネツィアも、ナポリも同様だった。

フィレンツェ市内では、敵軍に占領されるのではとの不安が広がった。有力者たちの間にフランス王を離れ皇帝の側につこうとする勢力も出るなど、分裂と対立も生じた。皆が動揺する中、サヴォナローラだけは一見、悠然としていたかのように見える。

というのもおそらくこの頃、彼は「ある親友へ」(「ある親友への小書簡」)と現在では題され、「親友」とはドメニコ・ダ・ペーシアだったと見られている手紙で、「自分が言ってきたことを行なえばフィレンツェはピーサもとりもどして平安を得始めるだろう」と明言しているからである。

これまでピーサを取りもどせなかったのは、自分がくり返し言ってきたことをせず諸々の罪を重ねてきたから

中で得た思考、彼自身の思想なのではないか。それゆえに、——あえて引き続き近現代の視点から大仰に言うならば——「普き民衆の統治」の保持に不可欠な不断の権力監視と権力への抵抗、思想の自由、思想表現・発言の自由といった近現代の政治原理にもつながるような思想にまで展開したのではないかと思える。

無論、彼の志^い向^くする「神の都」^{セラフィニ}、フィレンツェの統治は、神の意志、神の法に則した「正しい」統治であり、そうした正しさは、天界の「熾天使」のフィレンツェにおける代行人である彼自身によつて判断される一元的統治、神の統治である。この原理と法の枠内での「自由」が彼の説く「自由」である。この意味では、近現代の政治原理とはまったく逆の原理、近現代がその克服を目指してきた原理に基づいている。そうではあるけれども、いやそうであるがゆえになお、権力機関に対して、あるいはその内部で、誰もが自由に発言できる「民衆政体」、「普き民衆統治」という発想とこの発想に関わる発言は、サヴォナローラ自身の伸びやかな思考を、思想を感じさせてくれる。こうした感じを覚えさせられるのは、彼の生涯の他の時点では皆無だと思える。

すぐ前でふれたように、懐柔拒否の説教の後、教皇のみならずイタリア内外の権力者たちも、サヴォナローラの意向、動向に留意することが少なくなった。神聖ローマ皇帝マクシミリアンやイタリアの権力者たちにとつて、春の終わりに夏にかけて、フランス王という最も警戒すべき者のイタリア再襲来を恐れる必要がなくなった時点で、サヴォナローラの存在は小さくなっていたのだ。フィレンツェ市内では、逆に彼への反抗の声が強まった。フランス王の威勢、威力の消失は、フィレンツェにとつてもサヴォナローラにとつても、きわめて大きな意味を持ったのだ。

彼が、イタリアを罰する「神の使者」だと称揚していた（参照、↓Ⅷ章）フランス王は、今や、他でもない彼

「彼は心根はいいのだが、あの意見は気に入らないと言うのだ」。「評議會は自由であらねばならない」。

その上でこう述べて説教を終える。――「このように汝らが行なうなら、そして団結し、共通善(「公益」)を愛し合い、あらゆる事で「神に」祈っていくなら、汝らの諸々の問題はうまく行くだろう」。

サヴォナローラが、このように自分は普遍的真理を語るために「自由でいたい」、俗界のどんな権力者にも、教会の高位聖職者たちにも一切、縛られずに「自由でいたい」と端的に語るのは、めずらしい。しかもその自由は、権力者たちが自分に覚える何らかの「恩義」にも縛られたくないという徹底したものなのだ。あえて近現代の視点から言うなら、内心の徹底した自由、その自由な内心から生ずる思考の表現の自由を、彼は希求しているのだ。加えて、「政庁」という権力機関の権力強化に注意し抗議せよという指示や、言論の府における言論の自由の重要性の強調は、彼にはさらにめずらしい。のみならず、その自由を守るためには発言者の人格を否定するな、人格は肯定し発言内容を「自分の気に入らない」と言えといった、人間の心の機微にふれるような指示は、彼の他の説教にはまずないのではないかと思える。現代人が自由な議論のありかたを説いているかのようなのである。読んでいて何か心を救われる感を感じる。

というのも、ここまで彼の生涯をたどってきて明らかのように、彼の思考は、神の「正しい」信仰にもとる人間の、中でも悔悛も告解もすることがない人間の肉体および人格の全面的な、かつ未来永劫にわたる否定こそが「正しい」、神はそう命じている、といった原理を核としていて、と思えるからである。

だがここでは彼は、神の信仰や信仰する教義に縛られていない。少なくともこれを読む者は、神を感じることもなく人間サヴォナローラの思考にふれることができる。

これは、メデイチ支配下での現実の統治を直に見聞し体験した彼が、その現実と自分の内面で虚い、^{じか}対話する

支配者にも恩義を感じてほしくないから、あらゆる者から離れていたいからです」。……「あなたたちの誰からも、高位聖職者たちからも自由でいたいのです」。(傍点は引用者)……「私が国政に干渉していると外部に向けて書いている者たちは、それが嘘であることを分かっているのです。私は良い(「正しい」)法、正しい生き方について普遍的なことを言っているのであって、あなたたちの国政についてだけ特別に言っているのではないのです」。

一体、何を言おうとしているのか？ 彼は聴衆に、「とにかくこのようにせよ」と、ようやく具体的に命じ始める。――第一に、「良き(「正しき」)キリスト教徒であれ。なぜなら神が、聖女(「マリーア」)が、この都市(「国家」)の統治について、支配について決定して下さったからだ。告解するのだ、聖体を拝領するのだ」。第二に、「共通善(「利益」)を愛するのだ、助けるのだ」。第三に、「この大評議會を支持するのだ、支援するのだ」。「この評議會をよく整えていくのだ、磨き上げていくのだ」。第四に、「重要な事を行なおうと思ったら思慮深い市民たちを呼ぶのだ。えこひいきせずに呼ぶのだ」。

これだけなら、これまで何度もくり返してきたことばかりのようで、あえてここで注目する必要もないように思える。しかし彼はすぐ、この第三と第四に関連して、「さらに」と説明と指示を二つ加える。

一つは、――「政庁」が「思慮深い者ではなく「えこひいきして」お人好しとか馬鹿者とかを呼ぶのを目にしたら、政庁は「そういう者たちを利用して」強大になろうとしている」と言うのだ。もう一つは、――フィレンツェの諸々の評議會、とりわけ「大評議會」においては、「誰にでも「評議に」自由に助言させよ」、「誰にでも自由に話をさせよ」、「話している者を誹謗するな」、評議會で話す者のことを悪く言えないよう何らかの罰則を作るのだ。」「助言している者が気に入らなくても、その者のことは悪く言わず、その議論は気に入らないと言うのだ」。

血の帽子です。これが私の望みです。

教皇ではなく、神に直接、答えるという形をとっている。こうすることで暗に、自分の真の対話の相手は神だ、神だけだ、神に背き続ける汝、教皇などに答える必要も意味もないと公言し、はねつけている。はねつけながらしかし、枢機卿という高位の象徴である「緋の帽子」を明確に拒絶している。彼がこれまで使ってきた言葉で言いかえるならこうなるだろう。――神の意志を、神の栄光を守ることと得られる「緋の帽子」、死という「神の恩恵」の象徴である帽子以外、自分は何もいらぬ。汝、教皇ら真の信仰心無き者たちが身にまとっているうわべだけの世俗的虚飾など、「何の役にも立たない」。いや、人をまどわせ、「正しい生き方」からはずれさせ、墮落させるだけのものだ。罪を犯し続けさせるだけのものだ。――教皇という、この世の信仰世界の頂点に立つ者であるはずのアレクサンデル六世の現実の有りようを、だれの目にも明らかな頹廢、墮落、虚飾の体現者という有りようを、全面的に否認しはねつけている。「真の信仰心」を欠くほどに増し続ける虚飾、虚礼の激しい弾劾、拒絶である。

このような返答をたたきつけられた教皇が、以後サヴォナローラの懷柔を考えなくなったのは当然だった。教皇は、「自分の前ではもう彼のことは良きにつけ悪しきにつけ口にするな」と命じたという。しかし、教皇は直ちにサヴォナローラの説教を阻む動きに出たわけではなかった。教皇のみならず、イタリア内外の権力者たちもサヴォナローラの意向、動向に目を向けることが少なくなった。その必要がなくなっていたのだ。こうした事情は後に述べることにして、次に、八月二〇日のこの説教で注目すべきもう一つの論点を見てみよう。

居ならば「政庁」の閣僚たちに語りかける。――「私は真理を語ろうと思ったのですが、これはどんな君主や

自体がだましだという非難に対して、「超自然の光」を得て言っているのだからその非難は間違っている、「神を冒瀆」することになると彼は言っているのだ。おそらく、自分は説教師としては「神の位格ベルグナを得ている」「神の召命を受けている」「正しい」説教師だから当然、神から「超自然の光」を得ていると、彼は思いこんでいた、信じこんでいたのだらう。こうした自己幻想を抱いていたのだらう。よりの確に言うならば、彼の内面世界はもうこうした自己幻想に満ちていたのだらう。内面をこのような状態にしなければ、自分を支え外界の状況に対峙することができなくなっていたのだらう。

彼の反論は続く。―自分がこの都市〔国家〕フィレンツェを台無しにしたと言っているが、何を言っているのか。「大評議會を勧めた」のは私なのだ、これが無かつたらフィレンツェはどうなっていたことか。「流血と火炎に覆われていただらう。とにかく今の政体は神に由来するものなのだ」。また彼らは「私が国政〔Stato〕に介入した」と言っているが、それも間違いだ。自分は「政治家〔uomo di Stato〕ではない」からだ。また、自分がフィレンツェの「支配権〔reggimento〕を貴族〔genti uomini〕の手から取りあげて下層民〔plebe〕に与えた」とも彼らは書いているが、「知つてのとおりこれは真実ではない」。……こんなことばかり言っている「哀れな奴よ」「いくらでも好きなだけ私の悪口を言っているがいい。私は〔精神も肉体も〕強靱だぞ」。……等々、自分の言動の神的由来や正統性についてこれまで語り続けてきたことを、一段と激しい言葉で叫び続けた。そうしながら、さらりと、しかし敢然と教皇の懐柔案をしりぞけた。

私は帽子は望みません。冠も大きなものであれ小さなものであれ望みません。あなた〔神〕があなたの聖人たちに授けられたものだけを、すなわち死を望みます。緋の帽子〔と言われる〕なら〔殉教者たちの〕

少とも本格的なサヴォナローラ研究書、紹介書のほとんどでふれられてきたのに対し、後者は管見の限りでは逆にはほとんどで——というよりはすべてで、と言いたくなるほど——見過ごされてきた。

ここではまず第一点について少しくわしく見てみよう。

彼は静かに語り始めた。しかし、反対派への攻撃に入るとすぐ熱を上げた。自分がフィレンツェを「だました」と彼ら反対派の者たちは言っている。しかしこれは間違いだ。自分が言ってきたことはすべて「神に由来する」ものであり、私がだましたというならそれは神が私を、また人をだましたということになるけれども、「神が人をだますことはあり得ないからだ」。私が人を「だました」と言っている者は「神が人をだました」と言い、「神をけがして」いる。

こう総論的なことを述べると、「主よ、なぜ私を苦しめる者が増えるのでしょうか」と説教のタイトルを改めて示す。「主」が、「おお修道士よ、汝の諸々の罪のゆえだ」とサヴォナローラに答え、彼がそれを認めながら自分を語るといふ論法で反対派を論破しようとする。

自分は「私人としては罪のある人間」であり、この点を弁解するつもりはない。しかし「説教師としては、およびながら神の位格」(「la persona di Dio」)を得ている(「神の召命を受けている」)。私は「自然の光」で十分な場合はそれでもって汝(フィレンツェ)に語り、不十分な場合は神から与えられた「超自然の光」でもって語ってきた。それゆえ、私が神の「超自然の光をもって」、「神に代わって」と言う私が汝を「だました」と非難するのは、神が私と汝をだましたと非難することになる。これは「神を冒瀆することだ」。「なぜなら神がだますことはあり得ないからだ」。

一体どうしてこれが、自分の正統化の論理となるのか？ 神から「超自然の光」を得て言っているということ

自分の功績を思い浮かべさせようと、サヴォナローラはやはり意図していたのだ。

この説教の後、市内にまたまた発生したペストのような悪疫（「梅毒」）のため、集会が禁じられ、説教も長く中断せざるを得なかった。ようやく再開したのは一カ月半後の八月一日だった。

この一五日かその翌日頃、教皇はフィレンツェに、というよりはサヴォナローラのもとに特使を送った。彼を懐柔するためだった。おそらくは一九日、特使はサヴォナローラと面談し、彼がこれまで数々の説教で主張してきた諸々のことについて語った。その上で、今後それらを語るのを控えるなら、教皇は枢機卿の「緋の帽子」を提供すると約束するのだが、と教皇から命じられたとおりの話を持ち出した。サヴォナローラは穏やかにこう答えたという。——自分はこれまでいかなる種類の「顕職」〔= dignita〕も求めたことがない。自分には神から託された使命があるので、今の問いかけに答える前に神に祈ってその意志を問わねばならない。明日の説教でそうするので説教を聴きに来てほしい。その場で提案に答えよう。特使は退出し、翌朝の説教を聴きに来た。——こう書かれてきてはいるけれども、このやりとりを示す格別の文書が残されているわけではないようだ。⁽¹⁷⁾

ともあれ彼は二〇日、再開二回目の説教を、政庁宮の中の「大評議会」のための大ホールで、「政庁」の「執政委員」——閣僚たちを含む聴衆を前にして行なった。注目すべき説教の一つである。

「エ、ホ、バ、よ、我、に、あ、た、す、る、者、の、い、か、に、は、び、こ、れ、る、や、」（「詩篇」三篇一—二）——「主よ、私に敵する者のいかに多いことでしょうか」。サヴォナローラの解釈、翻訳によれば、「主よ、なぜ私を苦しめる者が増えるのでしょうか」——をタイトルとするこの説教で彼は、二つの主張を展開している。一つは、市内の反対派モルモラトリーやティエビデイに対する反論をくり返した上での、教皇への反論、というよりは教皇アレクサンデル六世の存在そのものの否定。これがこの説教の中心を成している。もう一つは独自の政治論である。前者についてはこれまでの多

役割を語れば、おのずと現実の情況の中での自身の存在の重みを感じさせることができるのだ。今見てきた二つの説教でも、それとなくこの新政体を語る。

六月二四日には言う。――フィレンツェよ、「汝の身についている最大の悪徳は、忘恩だ。汝は、キリストがこの都市〔国家〕を統治していることを今なお認識しようとしていない」。……「フィレンツェよ、汝には案ずべき事が多数ある。汝はかつてもっと大きな危機に在った。他の政体の変更の時だった。今どころではない危機に在った。しかし神が汝を救って下さった。血を流すこともなしにだ。……神の使者〔＝ *ministro di Dio* 〕が来た時、汝は今どころではない危機に在った。しかし神が汝を救って下さった」。

こう聞けば、無論、聴衆は「使者」の威勢から自分たちを救い出したのはサヴォナローだと、直感しただろう。そうであるようサヴォナローは意図していたのだ。

七月一日には、政体〔＝ *Stato* 〕論を展開している。政体として「上層有産層支配」〔＝ *Stato degli Ottimati* 〕、「王」すなわち「単独者支配」〔＝ *Stato di uno* 〕、「民衆支配」〔＝ *Stato popolare* 〕の三種を挙げ、それぞれについて語りながら、「単独者支配」が最悪で「民衆支配」が最良だと、そうは断言しないながらも示していく。その上で、自分が最も語りたいことを力説する。

フィレンツェのこの「普き民衆の統治」〔＝ *governo universale* 〕こそが最良のものだ。「我が民よ、我が息子たちよ、この政体に留まるのだ、他のものを探しに行かないことだ、これよりいいものは見いだせないからだ」。……「慎慮をもって判断するのだ、良く検討するのだ、そうすれば汝にとってこれ以上にいい政体は見いだせないことが分かるだろう」。

ここでは、あたかも政体論のみを説いているかのように語りながら、聴衆にこの最良の政体の設立に尽力した

外の対抗策がなくなる。しかし叫ぶだけで人心を鎮めることなどできないほど現実の情況が深刻になっていることは、彼も知らされていただろう。フィレンツェの財政難が深まっていたのだ。いつ終わるとも分らないピーサとの戦闘のためだった。ミラーノやヴェネツィアからの経済的、軍事的支援を受けてフィレンツェからの独立を目指すピーサを制し、再び自国の配下に抑えておくための戦闘には多くの傭兵が不可欠だったのだけでも、その傭兵への給与の支払いに窮してきていたのだ。⁽¹⁴⁾

この頃の、たとえば六月二四日の説教や七月一日の説教では、民衆、富裕層、行政官吏、各種評議会の委員のいずれについても、服装など日頃の生活のぜいたくさを指摘すると同時に、自己の「個別利益に気を配っている」、これが「汝らの悪の元」なのだと言明し非難している。皆が「〔各々の〕個別利益に目を向けていて全体の利益に目を向けていない、世俗的利益に目を向けていて霊的利益に目を向けていない」、「大評議会」の評議員たちは世俗的および霊的共通善（「利益」）を守るためにあの評議会に在るということを確認していない」、と非難し続ける。評議員には加えて、「汝らはあの神の議場に入る資格はない」と宣告する。

しかし、こうした非難、宣告をくり返しても現実の情況の打開につながらないことは、彼にも感得されていたのだろう。「霊的」問題はさておいて世俗的な問題ばかりを論じ合っている者たちを非難しながらも、現実的と言えなくもない提案をする。富裕な市民は都市〔国家〕フィレンツェに、普段の高利得ではなく無利子で資金を貸し出せというのだ。そもそも利子というものを禁じたキリスト教の元来の教義に則した指示ではあるけれども、彼が考え得る精一杯の現実対応策なのだろう。

これにも増して現実に関わる積極的発言をしようとするれば、彼に残る素材は唯ひとつ、「大評議会」問題だった。「大評議会」とこれを「形相」（「核」とする新へ共和制への樹立を、またそれらが現にはたしている機能、

ることはせず、配下の親しい修道士ドメニコ・ダ・ペーシャにさせたというが、その理由は分かっている。⁽¹⁾

五月以降、サヴォナローラは市内で説教を断続的に続けた。続けざるを得なかった。市外の情況が彼にとって不利になるにつれ、アツラツピアーティやティエピディなど市内の反対派の攻撃が執拗に、かつ激しくなっていて、しかもその内容が悪質になっていて、放置しておけなくなつたからだ。

五月八日、すぐ前で見た四月一〇日の説教以降、久方ぶりで説教壇に上がった。ペスト蔓延の恐れがあることを理由として——ではあつたけれども実際は主に反対派の激しい攻撃集会阻止をねらつて——四旬節後二カ月間、説教集会を含む集会禁止令が出されていたのだが、彼には反対派への反撃のため特別に説教の許可がおりたようだ。⁽²⁾

この説教では、自分⁽³⁾についての悪宣伝の一例を挙げている。それによると、彼ら反対派は、四月にサヴォナローラが近郊にくり返し説教に向いたのは、説教のためと見せかけながらフィレンツェの大金を市外に持ち出すためだった、フィレンツェから逃げ出す準備のためだった、と執拗に宣伝したという。これについて彼は言う。――

「我々は今、ここにいます。我々は逃げていない。……〔私がフィレンツェの金を持ち出していたらその〕私を捕まえられるなかつた汝らフィレンツェ市民にとって損害だったぞ！」そんな悪宣伝を続けている「汝ら邪^{よしま}な者たちよ、全能の神は汝らに苦難をもたらずだろう」。「そう神が言っているのだ」……「汝ら善人〔正しき者〕たちよ、恐れるな」、うろたえるな、「神は悪人〔邪な者〕ではなく汝ら善人を助けて下さる」。……「フィレンツェよ、私が汝にまず言いたいのは、『信じよ』ということだ。汝の神を信じよ、汝を今の諸々の災難から救い出して下さるのは神のみだと信じよ」。

苦境に立たされれば立たされるほど、彼には神を信じよ、その神の言葉を伝えている自分を信じよ、と叫ぶ以

言い、このようであれば「神は引き続きあなたを助けて、守って下さるでしょう」と結ぶ。^⑤

この時も、このミラーノ公を含む権力者たちの裏面での政治行動は、やはり、まったく変わっていないかった。公とサヴォナローラが書状を交わしていた時から一ヵ月にもならないうちに、公もヴェネツィアも、フィレンツェに抵抗するビーサに経済的、軍事的支援を続けていたことが明らかにになった。またナーポリでは、ナーポリ王軍がほぼ全領土を征服し、残されていたフランス王軍の全面降伏も近くなっていた。このため、フランス王のイタリア再侵攻の可能性はほぼ消えた。それとともに、フィレンツェに、またサヴォナローラに対するイタリアの権力者たちの姿勢はまた変わった。フィレンツェ市内での反サヴォナローラ派の勢いはまた増した。

一方サヴォナローラは、この間も、プラートやピストイアなどフィレンツェ近郊にくり返し出向き、休みなく説教を続けていた。どこでも聴衆が多数、押し寄せたという。その中には、それぞれの地の者は無論フィレンツェから出かけた者も少なからずいたという。また民衆は無論、修道士たちや文人たちもいたという。^⑥

また市内ではこの頃、彼の教義解説の小論がラテン語で、あるいはイタリア語に翻訳されて次々に活版印刷、刊行され、速記された説教の数々と刊行された。いずれも空前の売れ行きを記録するようになった。フィレンツェでは一四七一年に始まったばかりの活版印刷が、彼の言説を広めるのに大きく貢献した。彼の評価、名声をフィレンツェの内外で急速に広め、かつ高まらせた。逆に彼の名声と刊行本の売れ行きが、フィレンツェの活版印刷を活気づけた。よく言われてきたように彼の書が市内の刊行書の中で最大の販売数を見せたのだ。^⑦

「政庁」は、翌五月から（二ヵ月間任期）の新「執政委員」の選出に、高まる彼の名声、強まる威信を利用しようとしたのだろう。使者を彼が出向いていたプラートに急ぎ走らせ、彼にすぐフィレンツェにもどって「大評議会」の大ホールで説教するよう求め、彼をフィレンツェに連れもどしたという。——尤も、もどった彼は自分で説教す

の他のどんな移ろいやすいものも褒章も得ようと望んでも欲してもいいからです」。ここに書いたことから自分に生ずると思われるのは、「悪名、罵詈雑言、迫害、そして最後には死、だけです。私は死を、自分の最終の歓喜として大きな期待を抱いて待っております。といいますのも、私にとって生はキリストの〔聖別の〕油を塗られており〔キリストに献げられており〕死は〔キリストからの〕恩恵だからです」。二月二三日の説教ではラテン語で語った文言である。(参照、↓前章)

ここには、この時点での彼の心情がそのままに吐露されていると言っているだろう。彼は今後こうした信仰に基づく心情を抱いて一途に情況に対応していくのだろう。それにつけても、裏面では自分にずっと敵対し続けている歴戦の軍人にして独裁的君主、——しかも傭兵隊長の身から数々の奸計、奸策を重ねてミラーノ公の座を手にし、公としても、すぐ前でふれたようにイタリア内外の権力者相手に策謀をめぐらし続けている、まさにルネサンス・イタリア的小君主⁽⁶⁾——である相手に、突然、このように心をこめた手紙を書く修道士には、政治の地平で生き抜いていくことなど、やはりそもそも不可能だったのではないかと思われる。

この手紙に対し公は、折り返し二〇日に返書を書いた。御手ずからの書簡を「正しき修道士の書」として拝受した、……罪を悔い改めよという自分たちや他のイタリアの君主たちへの勧告については、少なくとも自分たちは「正しきキリスト信徒としての務めをはたすよう怠りなく努力致します」、等々、一読して何か下心⁽⁷⁾がありはしないかと思わざるを得ないほど恭順の意に満ちた書面である。

これにサヴォナローラはすぐ、二五日付の書状を送った。「好意的な」返書を見て……、という、公にやささかの疑いも覚えていないと思わざるを得ないような短い手紙である。「悔い改めるようにとの私どもの普遍的な勧奨については、特に何かを言う必要はありませんが、あなたが書いておられる神への心と畏怖は大変うれしい」と

碍にくり広げられていたのだ。

こうして一時、サヴォナローラへの攻勢が弱まった。市内で最も執拗に反サヴォナローラの動きを続けさせていたミラーノ公の姿勢が変わったことは、市内での彼サヴォナローラの場合に小さくない影響を及ぼした。おそらく公の駐在使節と何らかの接触があったからなのだろうが、サヴォナローラは四月一日、公に手紙を書いた。公にのみならずイタリアのあらゆる者に向かって語りたいことを書いた。

冒頭、公に率直に書いている。――「あなたは、神の前で正しく行動していない者たちから情報を得て、私と私の説教に不満を述べておられると聞いております」。そういう者たちは「おそらく、私はあなたの味方ではない、あなたに敵対する言葉をまき散らしているとあなたに説いたのでしょうか。まことに残念なことです」。私は「閣下もイタリアのすべての君主、イタリアのすべての者も愛しています」。……「神の恩寵」によって私は、イタリアが「悔い改め」て神に慈愛を求めなければ神がイタリアに下す「大殺戮」のことを、「照らし明かされたのです」。この「悔い改め」を、自分はフィレンツェではすでに六年も前から、つまり九〇年から教え勧めてきた、他の所では一〇年以上前からそうしてきた。それなのに全イタリアが「行ないを改めなかった。それどころか前より悪くなった、万事にわたって逆のことをしてきた。それゆえ神は怒りをやわらげるところかかつてないほどイタリアを怒っておられます。それゆえ閣下、あなたに警告します」と改めて公に言う。――「悔い改めること以外、あなたにとって救われる方法はありません。閣下、あなたの救い主に感謝しご自身の諸々の罪を悔い改めようとなさることをお勧めします。神罰が近づいているからです」。

そして最後に言う。――「このようなことをあなたに書いたのは、「人間としての恐れからでもこの世の物事への愛着からでもありません。といひますのも私は、あなたからも他の君主たちからも、金も銀も好意も名声も、そ

すべての権力者たちにはあったのだ。

ミラーノ公とヴェネツィアは主に、神聖ローマ皇帝マクスィミリアン一世に接近しイタリア進軍を勧奨することに力を注いでいた。無論、皇帝軍をフランス王軍に対抗させるためだった。そうしながら同時にミラーノ公は、フィレンツェに駐在させていた使節を通じてサヴォナローラに接近し、彼を通じてフランス王との関係修復をはかろうと考えていた。

同様のことを、反王同盟の中心である教皇も考えているとさえ言われていた。フランス王軍再襲来の報に最も驚き恐れていたのは教皇だったのだ。王軍再襲来が語られ始めてから、もしそうなれば同盟陣営の権力者たちそれぞれが、とりわけミラーノ公がどう動くか分からないという不信と不安に、教皇はとらわれていたからだ。先に王にイタリア侵攻を強く勧奨し誘導していながら、王軍の力を見せつけられるとすぐ反王に転じたミラーノ公が（参照、↓XII章）、改めてまた王に接近しているとも伝えられていたのだ。教皇は王との和解の意をもらしている、反王同盟から自身が抜け出そうとしているのではないか、といった噂さえ流れた。

実際、教皇も息子チェーザレ・ボルジアも、サヴォナローラへの対応にばかり気を取られてはいられなくなっていた。それどころか、可能であればサヴォナローラを利用しようとしていた。彼と融和し彼に自分と王との仲介役をはたさせよう、そこまではいかなくても彼と融和すれば王は自分に強く敵対してはこないだろう、と期待していたという。

教皇のみならず同盟陣営の権力者たちのいずれもが、相互に相手への不信にかられながら、その時その時の自己の権勢、権益のために同盟したかと思うと破棄し、対立して戦い、そしてまた同盟したかと思うと裏切つて敵と結び、……等々が、——すでにくり返し指摘してきたことではあるけれども——やはりここでもまさに融通無

よりもなお感じさせるように思える。自分の意見は神に由来しているから「一点の間違いもない……」とくり返したのに、その後すぐ、自分が内心に抱く見解によれば大罪を犯し続けている教皇、しかも自分の処罰を企んでいる教皇について、彼はその大罪を端的に指摘することも非難、糾弾することもできず、相変わらず婉曲にしか言えないのだ。

教皇からすでに彼への不服従の罪の疑いを指摘されていた（参照、↓前章）サヴォナローラは、その疑いの正当化の根拠となるようなことは何としてでも残さず、身を守らねばならなくなっていたのだ。

しかし彼にとって幸いなことに、イタリアの情況がフィレンツェの外部で変わり始めていた。四月初めから、フランス王のイタリア再侵攻が迫っていると語られていたからだ。王が先のイタリア撤退の際にナーポリに残した全軍の半数近くが、その直後に復帰したナーポリ王の攻撃にさらされ危機に陥っていて、その救済のためイタリアに再び攻め入らねばならないとフランス王が語っている、と伝えられていたのだ。^③

この報にイタリア内部の権力者たちは驚き、恐れ、急ぎ対策を講じ始めていた。とりわけ、ミラーノの公ルドヴィーコ（イル・モーロ）、教皇アレクサンデル六世およびヴェネツィア共和国の動きは激しかった。三者は相互に相手に不信を抱き、相手を警戒し中傷し合いながら、それぞれ策を弄し始めていた。こうした中で、この三者も、そしてイタリアの他の権力者たちも、密かにサヴォナローラを利用しようとしていた。様々な非難、反撃を受けながらも威信、威勢を増す彼との良好な関係を持つとうとうこめき始めていた。一貫して王と良好な関係にある彼を介して王に接近し王との良好な関係を得られれば、王軍の再襲撃を回避できるのでは、仮に王が再襲撃に打って出ない場合でも王領における商業活動の許可、特権の認可を得る望みが生ずるのでは、との計略がこれら

「靈感を得て……」と言って「啓示を得て……」と感得させておきながら、自分は「啓示」を得たと言ったことがないと言ってきたのと同じ弁明である。いうならば詭弁である。確かに彼は、非難、糾弾の相手を教皇ともアレクサンデル六世とも名指しすることはまったくなかった。しかし世に周知されている教皇の目に余る諸悪を、実に鋭く、実に真つ当に非難、糾弾してきた。くり返しそうしてきた。だが、自分が現実^に在る位置からして、教皇を名指しすることはできなかった。ましてや、教皇に、自分が行なっている非難の内容のどこが間違っているのかと昂然と言いつつことなどできなかった。自分に「大きな危険」が迫っているこの時点ではなおできない。しかしだからといって、沈黙することは自分の気性も良心も許さない。自分の説教を聴いてきた信徒者たちが自分に暗黙に期待しているであろう毅然たる姿勢を、自分の方から崩すことも、到底できない。

彼は、自分の「司」から身を守りながら自説を貫く論法を巧みに続ける。「ローマに」自分のことを告げるならこう告げよ、――「ローマに実に大きな神罰が迫っている……」。……教皇がローマを「救う意志があるなら、それは、人々が悔い改めることに心を向けるよう良き手本を示して、あらゆる者を説得するという方法によってのみ、可能だ。そうしなければ、ローマは破滅させられるだろう」。……「教皇が自分のことを彼（＝サヴォナローラ）はどう言っているのかと尋ねたら、何も、と答えよ」。(傍点は引用者)

彼は、「良き手本を示して」人々を「悔い改め」に導くと教皇に言うことで、真つ先に大罪を「悔い改め」ねばならないのは汝、教皇だと婉曲に言っている。具体的な非難も罵倒もしていない。しかもこの後すぐ同じ言葉をくり返した上で、「これが、我々が教皇に言わねばならないことのすべてだ」と改めて断言している。こうして、自分は説教壇から「誰かを名指しで非難したことはない」と形式上は弁明可能な範囲で自説を貫いている。

だが、こうした彼独特の詭弁が、ここでは、彼の芯の強さとか健気さとかよりも、哀れさ、惨めさをこれまで

理に反することは何もないからだ。

これは全体として、これまで言い続けてきたことのくり返しのようにも受けとれる。しかし、これまでは間接的な表現で言ってきたことを、ここでは、「……の場合は」、と仮定の事としてではあるが、「汝は間違っている」と明言している。しかも、そう「言うだろう」とこれからの決意として述べている。かつその理由を、自分の失脚をねらう「多くの者が」……自分の「あらゆることを」さんざん調べたけれども、問題になることは「何も見つけられなかった」からだ、と断言している。自分には「真理に反することは何もない」と豪語している。これらは、七日前のボローニャにおける教皇招集の会議の顛末を誰か密かな支持者から知らされていたからこそ発せられた言葉だろう。

他方、こうした背景を知らなかっただろう聴衆は、これらの言葉を教皇への真っ向からの挑戦だと感じたことだろう。というのも彼は、上記の言葉に、自分は教皇にも同様の対応をするとつけ加えているからだ。しかし彼は、ここでもいつもながらの弁明も忘れず加えている。そうしながら教皇を間接的に糾弾し続けている。まず言う。

さあ、教皇に言おう。私が聖下のことを悪く言ったと聖下に話されたり書かれたりしてきた。これは真実ではない。聖書には書かれている。「民の司〔＝principi〕をのろつてはならぬ」と。こういうことを私はしたことがない。私はここ「説教壇」から誰かを名指して非難したことはない。——（ここで引かれている聖書の文言は、サヴォナローラは指摘していないが、「出エジプト記」一二二章―28）

このくだりに、——サヴォナローラにとっては事実——独特の解説を加えて語った上で彼は、「人間には見えないものを信ずることが真の至福なのだ」と説いている。

その上で、自分が汝らに言ったことは神が言ったことだ……神が自分にこう言ったのだ、だから「自分が言ったことには一点の間違いもない」、等々とくり返している。つまり、汝らの目には「見えないもの」である自分と神とのきずなを「信ずることが真の至福なのだ」と聴衆に感得させようとしている。この章節を説教の素材とした意図はここにあったのだ。何としても自分の神性を、すなわち自分がフィレンツェにおける「熾天使」の——天界の最上層に位置し神から直接その意志を伝えられて下位の天使に伝える天使の——代行人である（参照、↓X章）ことを皆に思い起こさせ、改めて信じさせねばならなかったのだ。

しかし、この説教には彼のもう一つの意図がこめられていた。教皇への反論である。教皇が一週間前にみずから招集した会で自分を懲罰する企図を実現できなかったことを、自分はすでに知っているとし峻して彼は言う。

……自分は常にローマ教会に全面的に服従するつもりである。ただし教会が神に、あるいは慈愛（＝carità）に反することを命じた場合は、そういうことはないとは思いますが、別だ。そういうことがなされた場合は、その場合は言うだろう。汝はローマ教会ではない、汝は人間（＝uomo＝罪ある俗人）であつて牧者（＝Pastore＝聖職者）ではない。なぜなら牧者は神に、慈愛に反して命ずることはないからだ。そういうことがある場合は言うだろう。「汝は間違っている」。私がこう言うのは、多くの者が多くの邪よこしまなことを論じたり論じているからだ。汝も知っているように、「破門状が届くだろう」と言う者たちがいる。しかしそれはまだ届いていない。彼らはあらゆることを細かく探りかつ調べたけれども何も見つけれなかった。「私の言動には」真

一週間後の一〇日、サヴォナローラは説教壇に上がった。二月に四旬節の間と期間限定で請われて始めた説教の続きだった。すでに四旬節は終わっていたけれども、その最後の説教として壇に上がったのだ。

新約聖書「ヨハネによる福音書」二〇章19、「この日すなわち一週のはじめの日の夕、等々」をタイトルとするこの説教では、これまでも増して自分と神とのきずなを強調している。自分が汝らに言ったことは神が言ったことで自分が言ったことではない、神が自分に言ったことだ、自分の意見は神に由来している、だから「自分が言ったことには一点の間違いもない」、等々とくり返している。

しかしこうくり返す前、まずタイトルとしている「ヨハネによる福音書」二〇章19について長く解説している。だが彼の解説よりも、聖書のこの章節の内容を見た方が彼の意図を知りやすい。

——磔^{はりつけ}にされ息を引き取ったイエスの墓に行ったマグダラのマリアの背後にイエスが「出現」し、自分は神の子なのだと言ってきた。マリアはそのことをイエスの弟子たちに報告した。しかしイエスはその日のうちに弟子たちの家にも「出現」し、その傷ついた「手とわき」を見せた。彼らは「主を見て喜んだ」。つまりマグダラのマリア同様、弟子たちも自分が見たのは「出現」した神の子イエスだと信じた。その場にいなかった弟子トマスは、他の弟子たちからイエスの「出現」を告げられてもそうは信じなかった。すると八日後イエスがトマスの前にも「出現」し、自分の体に手であれよ、自分が磔にされた時に受けた傷あとに手を入れてみよ、そして自分がイエスであることを信じよと命じた。トマスは言われたとおりにしてようやく「わが主よ、わが神よ」と言った。つまりイエスの「出現」を、イエスが「神の子キリスト」であることを、信じた。するとイエスがトマスに、「汝はわたしを見たので信じたのか、見ないで信ずる者は幸いである」と言った。——

- IX 「運命の一四九四年」(2) — 〈政治的〉修道士の誕生、フィレンツェ政治の中心へ、フィレンツェを「神の都」に 一九二号
- X 「大評議会」、ハサヴォナローラ共和制▽
— 「神の都」の統治構造、最上層に立つ熾天使代行人^{セラフィニ} 一九五号
- XI 強まる内外の敵の攻勢(1) — 「信仰心無き者たち」^{エビデ} 非難、最高指導者の高揚、動揺、不安 一九八号
- XII 強まる内外の敵の攻勢(2) — 教皇アレクサンデル六世前面へ、せまる「大きな危機」 二〇一号
- XIII 激震の前兆(1) — 「このアモス」(「現在のアモス」)の叫び 二〇五号
- XIV 激震の前兆(2) — 消えるハ光輪▽、始まる運命の下降、強まる危機感 本号
- XV 破門 — 「異端」による、ではなく「不服従」による 続載



XIV 激震の前兆(2) — 消えるハ光輪▽、始まる運命の下降、強まる危機感

この年、九六年の四月初め、教皇はサヴォナローラを「全面的に罰する」と決意を口にしていたという。そして三日、サヴォナローラが属するドメニコ会の神学者一四名をボローニャに招集し、彼らに自分の決意の正統性を承認させようとした。おかたの者は、サヴォナローラを「異端者、教会分離論者、教皇座への不服従者、迷信信仰者とみなし」て教皇に追従しようとした。しかし一人の若者が昂然とサヴォナローラ支持の論を述べ、他の一人がそれに同調の意を表わしたことで、会は結論を得ずに終わった。教皇の決意は実らずに終わった。⁽¹⁾

サヴォナローラの時代、生涯、思想（十四）

須藤 祐孝

目次

I	ルネサンス・フェツラーラ、フィレンツェ、そしてヨーロッパ（1）	
i	ニコロ三世の統治期（1402-41）	
ii	レオネッロの統治期（1441-50）	
iii	ボルソの統治期（1450-71）	一四五号
iv	エルコレ一世の統治期（1471-1506）	一四九号
II	サヴォナローラ本家、分家と分家家長・祖父ミケーレ	一七三号
III	誕生、そして旅立ち	一八二号
IV	〈出家〉―「イエス・キリストの騎士」「戦う騎士」へ、 「肉体の医師」から「魂の医師」へ	一八三号
V	〈天啓〉、そして〈政治的〉修道士の胎動	一八八号
VI	強まる〈政治的〉修道士の胎動	一八九号
VII	志―原初の教会の再生―、忍び入る政治の〈魔性〉	一九一号
VIII	「運命の一四九四年」（1）―メデイチ体制の崩壊、 フィレンツェ外交の前面へ	一九一号